



マナ通信



今月のマナ通信

◎7月の週日の聖書日課 (列王記第2, ヘブル人への手紙
歴代誌第1、他)
◎土曜日・日曜日の学び 山上の説教 からの感想です。

戦後、遠く離れた紀州の地にもアメリカから福音伝道の為、宣教師がやって来ました。私は小学校の高学年だったと思います。スワンソンと云う方で怖くもあり、親しみもありました。乗用車の無い時代にフォルクスワーゲン(カブトムシ)に乗っていました。しかし、余り長く続かずクリスマス会を一度だけ経験した記憶にとどまります。日曜日の集会ではやはり賛美歌を歌うのが楽しかった。

この期間に、これと云って聖書の知識を得たのではありませんが、神様は存在していることを確信したように記憶しています。理由はと聞かれると・・・石ころは風化され形は変わるが、生命のある生き物になることは決してないからです。

誰かが造らなければ、この天地は存在せず、創造主なる神がこの世を支配していることは間違いないと思っていました。そういう感じを抱きながらも歳月は過ぎ、会社も定年退職をし、朝霞台の化粧品会社でパートとして働いていた頃、精神的に不安定な家内に当時、民生委員をしていた三弥子姉妹が声をかけて下さり、家内は所沢の集会に行かせてもらうようになりました。しかし、長くは続かず集会にも行かなくなりました。

そうしているうちに、持病の統合失調症が悪くなり、恐怖心と、幻聴で苦しみ日々の生活におびえていました。入院が決まった時、家内が入院する前に会っておきたい人がいる。というので、福島兄弟に自宅に来て下さるようお願いしたら快く引き受け下さいました。私は初対面でしたが、その時の兄弟は優しさに溢れ、この世の人と違っていました。自宅の小さな部屋の中でお話を聞くことが出来ました。そして、家内は入院しました。

後で解ったことですが家内は聖書を病院に持ち込んでいたのです。既にやめたキリスト信仰に戻ろうとしていたのです。私は驚き、すぐに福島家を訪ねこの事を報告しました。ご夫妻は喜んで下さいました。私はその時、クリスチャンとは良いものだなーと思いました。これがクリスチャンの品性と気品なのですね。

家内は三ヶ月余りの入院生活を終え退院しました。そして二人揃って福島家での集会に参加させて頂きました。

その時の話が、人間は生まれ変わることが出来る。リセットすることが出来る云うお話でした。この話を聞かせてもらい私は勇気づけられました。それは私の心の中に思い出したくない、忘れてしまいたい過去の事柄が一杯あったからです。これがリセットされるなら真にありがたいことだと思いました。

そして、平成21年(2009年)二人で福島家においてバプテスマをして頂きました。その時は、故橋爪兄弟姉妹ご夫妻も立ち会って下さいました。ありがたさで一杯です。(畑中伸之)

私たちはキリストにあずかるものとなっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です」(ヘブル3:14)

こうすれば、永遠の安息、永遠の御国に入ることが出来るのです。私たちは新生によって永遠のいのちを与えられているのです。そして、罪の奴隷から神の子とされ、国籍は天にあるのです。なんと素晴らしいことでしょう。

でも、そのことがわかっていてもそこに着くまでは、内に外に誘惑があるので脱落しないように信仰にしっかり立たなければなりません。しかし、私たちもお互いに励まし合うことで、信仰の火を消さずに燃え立たせることが出来るのです。

「ですから、聖霊が言われるとおりに。『今日、もし御声を聞いたら、あなたがたの心を頑なにしてはならない。』」(ヘブル3:7-8)

私は心がすごく頑な者です。だからここに書かれているように主が語って下さっているあいだに、主が招いて下さっている間に悔い改め、招いて下さっているあいだに、その招きに答えなさいと云うのです。主の招きを拒み続けていると、その恵みを取りあげられてしまうからです。

いいかげんな信仰でなく、主を慕って、全うな信仰を続けさせて頂きたいと思います。

(畑中千恵子)

信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。」(ヘブル12:2)

〈みことばを味わおう〉から。「私たちのうちに、みことばの種をまき、信仰を芽生えさせてくださったのはイエス様です。そしてイエス様は、一旦始められたことを途中で投げ出したりなさいません。最後まで完成させずにはおきません。だから安心していいのです。と 又マラソンでは途中で給水所があるように、私たちもみことばを読み、御霊の水を頂いて元気を回復しながら、信仰のマラソンを続けましょう」と書かれてありました。

この夏、東京オリンピックが開催されました。前回の東京オリンピックから57年が経ちました。私は当時21歳でした。その年の福音伝道集会に近所の教会に導かれて信仰を持たせていただき、翌年1965年夏にバプテスマしていただきました。

思えば、小学2年生の時に隣人の坂本さんに誘われて初めて教会学校というところに参加していただいたみことばカード、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」(マタイ5:3)に心が捕らえられました。

その後、大人になるまで、このみことばに、折に触れて励まされました。みことばをよく理解しないまま、勝手な思い込みなのですが、親の仕事の都合で引っ越しばかりでしたので、いつの日か、また教会に行って教えていただきたいと願っておりました。

さて、1964年の東京オリンピックに二番目の兄が、国立競技場のチケットが手に入ったからと私を連れて行ってくれました。かなり後方の高いところの席でしたが、心がとても高揚したのを思い出します。フィールドでは種々の競技が行われています。

トラックでは1万メートル競走が始まりました。1周400メートルで25周です。上位選手がゴールして、順位が確定すると、後続の選手たちは最後まで走らずに途中で降りてしまい、もうこの競技は終わったと思っておりましたら、まだ一人の選手が走り続けております。

はじめ、観客の反応は冷やかで、いつまで走るのかと嘲笑みだだったと思いましたが、段々、このセイロンの選手(今のスリランカ)の本気が分かって、観客も1つになって応援をし始めました。残り3周を走りきってフィニッシュしたときには、観衆が立ち上がりて讃えました。翌日、テレビで見たのでしょう。小学生か中学生の男の子がマッシュ棒で作ったという日本のお城を、その選手に是非プレゼントしたいと選手村を訪ねて、手渡している写真が新聞に載りました。

そんなエピソードを思い出しながら自分の信仰生活と重なって、23日の〈みことばを味わおう〉を読みました。私の人生は神様のあわれみと恵みによっていると実感いたしました。(福島三弥子)

固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のもので。」(ヘブル5:14)
 ソロモン王は主から何事でも望むところを求めよと言われたとき、民を正しく裁くための知恵を求めたとあります。

毎日事の軽重の差はあれ、選択したり決断したりしています。簡単に決められることもある反面、迷いに迷うこともあります。

祈っていると、最初とは違う考えに導かれることもあります。時間があるときはいいですが、即決しなければならないときには自分が間違っただ判断をしないようにと、祈ります。ヘブル書の言葉が心に響きます。

経験によって訓練された善悪を見分ける感覚を、磨き上げていきたいと、願っています。
 周りの喧噪けんそうに惑わされずに、まず御言葉に聞き祈り聖霊の助けを求める信仰生活を続けていきたいです。(広瀬裕子)

てすから、あなたがたの天の父が完全であるように、完全でありなさい。…」(マタイ5:46-48)
 「神が完全であるように…完全でありなさい」と聞かされて、私たちは自分の不完全さに気づきます。”(マナp101「祈り」より)を読んで、改めて私たちは自分では完全になれない存在なのだと自覚しました。

自分の不完全に対する完全な神の恵みを、ただひれ伏して受け取る。それがスタートで、神様を見ながら、一步一步自分の歩みを進めてゆけばよい、と再び思い起こしました。

世に完全を求めないこと、自他に完全を求めないこと、完全なのは神とその恵みなのだと知ることが大切です。

一方で完全へのあこがれはあります。完全な救いときよめは主によって約束されていますから、感謝して日々をすごしていきたいと思います。(永井亮子)

信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」(ヘブル12:2)

『みことばを味わおう』に、私たちのうちにみことばの種をまき、信仰を芽生えさせてくださったのはイエス様です。～この信仰のマラソンは、時に疲れて、途中で走れなくなって歩いても、立ち止まってもいいのです。

時には立てないほどの試練に遭うことがあったとしても、イエス様が私たちを背負って歩いてくださるのですから。大切なのは、マラソン自体を投げ出さないこと。天の故郷を目指す旅路をやめないことです。とありました。なんと幸いなことでしょう。

【東京2020オリンピック】では、『金メダル』を目指して、選手一人ひとりが、一生懸命に励んでいました。私たちキリスト者は、『金メダル』ではなく、『天の故郷』を目指して、歩み続けるのです。

『天の御座』で私たちを見守ってくださっているイエス様から目を離さないで、この世の旅路を歩ませていただきたいと願います。(外處トミ)



信仰の 創始者であり 完成者 そのイエスから 目を離さない

2021年7月31日

神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」(ヘブル4:13)

生きてると、自分が一人ぼっちのような、他の誰にも伝えることのできない気持ちに襲われ、孤独や不安に思う時があります。

けれど、私たちは神様の被造物です。創り主である神様が私たち一人ひとりの全てを知っていて下さるので、安心して毎日を過ごすことができます。今日もまた、神様と共に歩めることを感謝します。(外處光歩)



外處家のプランターで育てているスイカの赤ちゃんと収穫したてのピーマン

自分のために、地上に宝を蓄えるのはやめなさい。そこでは虫やさびで傷物になり、盗人が壁に穴を開けて盗みます。自分のために、天に宝を蓄えなさい。そこでは虫やさびで傷物になることはなく、盗人が壁に穴を開けて盗むこともありません。あなたの宝のあるところ、そこにあなたの心もあるのです。」(マタイ6:19-21)

地上ではなく、天に宝を蓄えることができるよう、いつも主に目を向けて、主にすべてをゆだねて歩いていけたら幸いです。(外處結実)

私たちも、一切の重荷とまとわりつく罪を捨てて、自分の前に置かれている競争を、忍耐をもって走り続けようではありませんか。」(ヘブル12:1)

背負う必要の無いこの世の重荷なのに、この世を生き続けてきた癖でわざわざ背負って悩んでしまします。そして、捨て去りたい罪も自分が不要と思っても、静電気ほこりでまとわりついてくる埃のよ

うに、払っても払っても付着してくるので実にやっかいなものです。

さらに、キリスト者がこの世で生きるとは、自分も馴染んでいた悪の支配する世界、つまり敵となった陣地の中で生きることなので、ついつい自分自身を含めて四面楚歌の中を生きるように溜息をついてしまいそうですが、そのような弱い信仰生活の中でも、主の導きと恵みによって、この世と決別させるために贈られた多くの経験を通じて、少しずつ重荷を下せるようになり、罪も払い捨てることができるようになってきたことがわかります。

弱くて愚かな私を忍耐強く導き続けて下さっている主の忍耐強さに感謝するばかりです。

(外處徳昭)

アというわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。(ヘブル10:19-22)

「こういうわけで」

この奨励のことは、「こういうわけで」とあるように、その前にある神学的議論を受けて導き出されたものであるから、一応結論的なまとまりを示しています。しかし、著者は、短い勧めだけでは満足せず、それぞれの点をさらに詳しく展開しています。

「大胆に……聖所に入る」

昔の幕屋や神殿の場合は、聖所、特に至聖所に近づく自由はありませんでした。唯一の特権を持っていた大祭司でさえ、「かってな時に垂れ幕の内側の聖所に入って……はならない。死ぬことのないためである」(レビ16:2)と警告されていました。

ユダヤ教の下では、普通の人には聖所および至聖所から閉め出されていました。祭司たちだけが聖所に、そして大祭司だけが至聖所に入ることができたのです。

今やそれはすっかり変わりました。ある特別な階級の人たちだけが神に近づくことができるのではなく、神はそのような特別な場所を設けておられません。それどころか、「兄弟たち」と呼ばれるすべてのキリスト者が、いつでも、地上のどこからでも、信仰によって神の御前に出ることができるのです。

「大胆に」

この「大胆に」は、ギリシャ語 **παρρησία** パレーシアで、「言いたいことを自由に大胆に全部言えること、大胆な自由、率直、あからさま、公然、人をはばからないこと、(相手に対して)大胆になれること、大胆になれる程の信頼」(織田昭ギリシャ語辞典)を意味するそうです。

以前、合同聖書研究会で、「大胆に」との日本語訳は誤訳ではないかと発言する方がおられました。確かに生まれながらの私たち自身をみれば、神の御前に「大胆に」とは不遜そのものでしかありません。「大胆に」とは、とんでもないことです。

しかし、キリスト者の大胆さは、自分の生まれながらの何かに基づくものではなく、神と人間の関係を回復して下さったイエス・キリストにおける神の恵みに基づくのです。

この「大胆に」とは、問題を解決して下さったキリストの十字架の贖いが比類ない完全なものであることを示すのです。この10章19節に至るまでに、9章11-14では「永遠の贖い」、9章15-22節は「契約の血」、9章23-28節は「完全ないけにえ」、10章5-10節は「有効ないけにえーイエスのからだ」、さらに10章11-18節は「神の右の座に着いた大祭司なるキリスト」を根拠として、神に近づく大胆な道を展開しています。

「聖所に入る」

以前の古い新改訳では「まことの聖所に入ることができるのです」と意識されていましたが、「まことの」という言葉は原文にはありません。新改訳2017では、「聖所に」に変わりました。この「聖所」は、「垂れ幕を通して」入る所ですから、天の至聖所、すなわち、神の御座そのものにほかなりません。このような高き天にある聖所に、地上にいる私たちがどうして到達できるでしょうか。

「イエスの血によって……入ることができる」

「いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。『わたしは、高く聖なる所に住み、心砕かれて、へりくだった人とともに住む』(イザヤ57:15)」。このイザヤ書のことは、私たちの何かによってではなく、ただイエスの血を媒介としてのみ実現します。なぜなら、キリストは、「ご自身の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられた」(ヘブル9:12)ので、私たちもその特権にあずかることができるのです。何と感謝なことでしょう。

「垂れ幕」

垂れ幕とは、聖所と至聖所の間を隔てる幕です。共観福音書は、イエスの死と関連して、「神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた」(マルコ15:38、マタイ27:51、ルカ23:45)と記しています。

私たちが神の御前に近づくために、この垂れ幕は裂かれなければならませんでした。すなわち、主のからだは死ななければならなかったのです。

このことから理解できることは、私たちは、キリストの罪のないいのちによってではなく、その身代わりの死によってのみ、近づくことができるということです。小羊なるお方が傷を負って死んで下さったからこそ、私たちは中に入ることができるのです。

これ以外に私たちが神に近づく道はありません。したがって、イエスの肉体という垂れ幕は、神と人とを隔てるために存在するのでなく、人を神に近づけるものなのです。

「新しい生ける道」

なぜ「新しい道」でしょうか。それは、キリストが「設ける」まで、この道は存在しなかったからです。それは、また「生ける」道でもあります。「わたしは道であり、……わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」(ヨハネ14:6)。この道はイエスご自身の「肉体という垂れ幕」を通過する道です。

「また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります」

私たちが、新しい道を通して聖所に至ると、そこには、「偉大なる祭司」がおられます。アロンは、「兄弟たちのうち大祭司(偉大な祭司)である者」(レビ21:10)と呼ばれましたが、新しい神の家の兄弟の中で最も偉大な方が祭司としてこれをつかさどっておられます。

私たちは祭司ですが(1ペテロ2:9、黙示録1:6)、自分自身のためには祭司を必要とします。キリストは私たちの偉大な大祭司であられ、キリストの現在のお働きは、私たちが続けて神の御前に迎えらるることを保証してくださっています。

しかし、それは終末的な光景であって、今は、そこに「近づこうではないか」と励まし合わなければならない時です。

私たちが、この世の有名人たちとではなく、「この宇宙の主権者」とお目にかかることができるのは、何とすばらしいことでしょう。(福島勲)

貴重なご感想ありがとうございました。

今回は8月号の感想を9月10日頃までに福島兄弟へお寄せ下さい。(畑中)